

## 2018年3月購入図書

No.	図書名	内容	著者名	出版社
1	ふたりは同時に親になる ～産後のズレの処方箋～	「ふたりで笑っていっしょに楽しく育児をしたい」そう思っていたはずの2人は、なぜ出産を機に「ずれ」はじめてしまうのか……。終わることなき保活やワンオペ育児に忙殺される「あきらめママ」と、そんなママの理解不能な不機嫌さに思わず「無関心をよそおうパパ」の心のからくりを解き明かす。	狩野さやか	猿江商會
2	おらおらでひとりいぐも	74歳、ひとり暮らしの桃子さん。おらの今は、こわいものなし——リズムあふれる文体で新しい「老いの境地」を描いた、第158回芥川賞受賞作。結婚を3日後にひかえた東京オリンピックのファンファーレとともに上京。アルバイト、新しい出会い結婚、二児の誕生。夫の死。「この先ひとりでするべ。」捨てた故郷、疎遠になった子ども。そして、夫への愛。震える悲しみの果てに桃子さんがたどりついたものは。	若竹千佐子	河出書房新社
3	「パパは大変」が「面白い！」 に変わる本	「イクメン」という言葉がもてはやされることなく、男性の育児が当たり前となった昨今。にわかに話題を集めるのは「イクメンブルー」という新たなキーワードです。男性も家事・育児の分担を求められる一方、賃金の上昇は見込めず、相変わらず長時間労働を余儀なくされている。そんな状況のなか、世間やママが求める「理想のイクメン像」と、仕事と家庭の両立に奮闘する「現実のイクメン」の乖離にいま、日本のパパたちが苦しんでいます。	安藤哲也	扶桑社
4	育児は仕事の役に立つ 「ワンオペ育児」から「チーム育児」 へ	残業大国ニッポンの働き方は、「共働き世帯」が変えていく。「育児経験が、リーダーシップ促進など、ビジネスパーソンにポジティブな影響を与える」という画期的な研究を元に、東京大学・中原淳先生と同研究室出身の浜屋祐子氏が、未来の働き方を考える。	浜屋祐子 中原淳	光文社新書
5	学校では教えてくれない 差別と排除の話	差別や排除を学校で教わることが少ない子どもたち。一方、学校ではいじめが問題となり、社会ではヘイトスピーチがニュースになったりする。自分がされてイヤなことは他人にしない。そんな簡単なことが、なぜできないのか? 「なぜ中学や高校で差別や排除を教えないのだろうか?」の素朴な疑問をきっかけに、現代日本の差別と排除の問題を、豊富な現場での取材を元に語り、解決への道を提示する。	安田浩一	皓星社

6	日本のフェミニズム SINCE1886性の戦い編	女性たちは何を願い、何と戦ってきたのか? 廃娼運動、売春防止法、リプロ、レズビアン運動… 日本のフェミニズムをその歴史の原点から、わかりやすく解説し、私たちの怒りの歴史として、日本のフェミニズムとフェミニストを知るフェミニズムガイドの決定版。	北原みのり	河出書房新社
7	母・娘・祖母が共存するために	ベストセラー『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』から10年がたち、今度は娘、母、祖母の3世代と家族という視点を入れ、団塊女性に象徴される母親のかかえる困難さに言及する。そして女性だけの問題にとどまらず、父親（夫）である男性、息子と母と関係にもふれる。	信田さよ子	朝日新聞出版
8	13歳から知っておきたいLGBT+	本書は、社会のなかで「自分は何者なのか」という問いに向き合い続ける約40名のLGBT+の生の声を収録。情報の充実具合はもちろんのこと、全篇を通じて伝わってくる「人間は多様であり、どんなアイデンティティも等しく尊重されるべき」というあたたかいメッセージに、心揺さぶられる一冊となっている。	アシュリー・マーデル 須川綾子（翻訳）	ダイヤモンド社
9	いじめのある世界に生きる君たちへ いじめられっ子だった 精神科医の贈る言葉	日本を代表する精神科医・中井久夫が自身の体験をもとに綴った「いじめ」論。いじめが進んでいく段階を「孤立化」「無力化」「透明化」の3つの段階で解説し、いじめられている子の安全の確保について論じる。	中井 久夫	中央公論新社
10	つらさを乗り越えて生きる 伝記・文学作品から人生を読む	子ども時代のつらい思い出、心から離れない罪悪感、うまくいかない母子関係・等々、誰しもが人生のどこかでつまずき、つらさを乗り越える困難に向き合います。そのようなとき、何がつらさを乗り越えて生きる力となるのでしょうか。つらさを乗り越える条件とは何でしょうか。 伝記・文学作品から人生についてじっくり考える機会となる1冊です。著者は元順天堂大学教授の教育心理学者。	山岸明子	新曜社
11	Difficult?Yes. Impossible? ...No. わたしの「不幸」がひとつ欠けたとして	「闇金ウシジマくん」「コウノドリ」「隣の家族は青く見える」など注目のドラマや映画で存在感を発揮する女優、高橋メアリージュン。彼女は言う。「幸せな未来を生きていきたい」——誰もが望む未来ではあるが、その言葉の裏には、自身が歩んできた「衝撃」の半生があった。	高橋メアリージュン	ベストセラーズ